

教員養成学部学生によるスクールボランティア活動のもつ意義と役割 －教育実践教室における事例研究から－

松 浦 善 満

(教育実践教室)

A Study of meaning on the School Volunteering by student in factory of education
－For Case study by Practical Education Section－

Yoshimitsu MATSUURA

2002年10月11日受理

問題設定

大学における教員養成は昨今の「教員養成のあり方に関する懇談会報告書」(座長:高倉翔)にも見られるようにシステム面でもソフト面でも質的な転換を迫られている。しかし改革の理念的提案は構想されているものの日常の大学教育実践での具体的な改革について語られることは少ないなかで、教員養成学部学生による学校支援活動・スクールボランティア活動のひろがりとそのが教員養成改革に有効性をもつのではないかという指摘がなされるようになった。

たとえば読売新聞社説は和歌山大学ならびに福岡教育大学の学生ボランティア活動に言及して「教育職員免許法で義務づけられた教育実習は授業の技術の習得が中心だが、このボランティアは子供との相談相手になることに重点を置いており教員としての実践的な指導方法が身につけられる」と述べている。(2000.4.11読売朝刊参照)

そこで本論では、①各地の大学で取り組みが広がりつつある学生の学校支援活動(通称:スクールボランティア活動)の背景を明らかにするとともに、②本学の取り組み(とくに松浦ゼミナールのスクールボランティア活動)をケーススタディすることにより、第一に、学生がボランティア活動をとおして何を学んでいるのかを明らかにする。第二に、この活動の役割と意義を教員養成との関係で明らかにする。第三に今後の活動の課題について論及する。

1. 学校支援活動（スクールボランティア）の広がりと背景

(1) ボランティア活動の理論的整理の必要

わが国においてボランティア活動の歴史的経緯をまとめた研究はいまのところないといつてよいだろう。しかしあえて取り上げるならば最近、永沼（1998）が、日本のボランティア活動を3つの時期区分している点が注目できるだろう。^{注1）}彼は、第二次大戦後の社会復興期の活動、70年代以降に活発化したNPO・NGO活動、80年代以降の企業や労働組合による『社会貢献活動（フィランソフィー）』といった時代区分による整理をしているが、どの分野の学問がボランティア活動の体系的整理をおこなうのかも未だに定かではないと筆者は危惧するところである。それはボランティア活動そのものが理論的整備を必要とするよりも実践の先行性が優位な存在であるからだ。前述の永沼もJ. デューイの経験からの学び、活動主導主義を哲学的・思想的基盤としてボランティア活動を意味づけようとしている点からも明らかであろう。筆者もそのような視点に共感しつつも同時に大人の世界だけでなく青少年の中にも広がりつつあるボランティア活動についての理論的整理とあわよくば体系化が必要であると考えている。その方法として3年間にわたって取り組まれてきた学校への支援活動をケーススタディーすることによりいくばくかの目標に近づけるのではないかと考えるのである。

(2) ボランティア活動の広がりとその背景

1995年1月17日の阪神・淡路大震災は私たちの記憶にいまも新しい。その際、若者を中心に延べ200万人が災害復旧活動に参加したことは、日本のボランティア活動史のみならず青少年史にも特筆すべきことである。

1999年のNPO支援法の制定に見られるようにボランティア活動支援の法制化が進み、各地で活動団体が法人化を進め始めた。一方、中学、高校段階でも「特別活動」や「総合学習」を活用した地域支援のボランティア活動が各地で始まっている。

ひるがえって大学におけるボランティア活動はどうであろうか。和歌山大学では10年前から学生の自主活動として不登校の子どもたちへのピアサポート活動が始まり親や地域社会の共感を得ている。大学構内では教員有志と学生とが草花のガーデニングや清掃活動を、そして教員を中心にしたホームレスへの炊き出し支援活動も取り組まれている。さらに本年は情報教育担当教員と学生・院生、現職の教員とによる学校への情報教育環境支援ボランティアもスタートした。

大学の教員組織においては、県下各地の高校生に出前授業にボランティアででかける活動が、また附属中学生が大学で学ぶ機会をもてるように篤志家教員による公開授業（「知の冒険旅行」）が取り組まれている。学生の卒業研究でもボランティア活動に関する研究が目立つようになった。このように近年大学教員・学生によるボランティア活動が活発化したのは本学に限らず全国的な傾向でもある。小学校への支援活動には琉球大学、大阪大学、奈良教育大学、静岡大学、宮

城教育大学の学生が取り組みをつづけている。^{注2)}しかしながら他方で、筆者は現代の青少年が自己の殻に閉じこもりがちであり、他者との協力や連帯感を弱めていることを危惧している。事実、連日、青少年による犯罪や問題行動はマスコミをにぎわせ、後を絶たない状況にある。これらの問題の背後には地域や家庭の人間関係の稀薄化があることはいなめないが、このような問題と青少年の積極的な動向とは表裏の関係にあるので問題を克服し、人と人とが相互に支えあい、共生の契機をつくりだす役割としてボランティア活動が活発化しているとも考えられるのである。

(3) スクールボランティアの意義

ボランティア活動は何らかの社会的支援活動、あるいは社会的貢献活動である。その性質は社会やヒトに対する奉仕、援助活動とみられるが、実はヒトやモノ、社会への支援活動を通してボランティア自身が相手や社会から教えられ自己を新たに形成する性質をもっている。したがって中学校の部活動や学級での支援活動に参加する学生自身が自己を振り返り、新たな自己を形成できる場でもある。

今回、このような活動に取り組む目的は、もちろん中学生への支援であるのだが、学生自身が自己形成の契機を得ることも大切な目的である。また大学における教員養成が従来は制度化された教育実習と教職の授業という形で取り組まれてきたが、あらたに学生が自発的に中学校現場の日常に接することによって、より実践的な力を形成することが可能になるのではという期待もある。大学ではインターンシップ（学生の企業、社会体験活動）が各学部で行なわれているが、教育学部においては従来から教育実習がこれに代わっていた。しかしながらスクールボランティア活動は、そのようなフォーマルな活動ではない。むしろ学生がフィールドである中学校で、生徒や先生から学びながらどのような支援が可能なのかを考え模索し発案しながらの体験活動である。したがって、このような活動はやや大げさに聞こえるが、日本の教員養成史にも画期的な意味をもつ。

さらにクラスや部活動に教員以外の第三者が参加することによって、学校の新たな変動を期待することも可能ではないか。とりわけ日本の学校教育は教師と生徒関係を中心に制度化され、親や地域社会はある意味では傍観者的存在であった。学校が第三者を受け入れることにより、学校を地域社会に開くことに通じるのではないだろうか。このような期待の下にスクールボランティア活動を私たちは位置付けたのである。

2. スクールボランティア活動の内容

(1) スクールボランティアの定義

スクールボランティア活動を定義づけるにはまだ時間がかかるだろうが、われわれの教室での実践にあたっては便宜的ではあるがこの活動を以下のように定義している。

スクールボランティア活動とは、学校外部の人の自発的意思により、学校の教職員・児童生徒への教育的支援活動のことを総称している。この活動には2つの特徴がある。その一つは市民・学生・保護者など多数の人が学校教育にかかわるので活動形態は多様であること。(活動内容の多様性) また、学校内部の者との合意や理解が前提になるので合意が取れない場合は外部者の意思があっても実際の活動が実行できない特徴をもつ。(外部者と内部者との合意の必要)

われわれが実施した活動は上記のような定義とともに一定の意味づけ(目的性)を行っている。そこでは、現代の中学生がさまざまな課題を抱えて成長している点に注視し、活動の目的を、第一に中学生の「学習に対する不安」、第二に「友だち付き合いに対する不安」、第三に前者の相互関連から生じる「自己に対する不安」という3つの不安に向き合うことを確認している。

思春期のまっただなかで生活する中学生にとっては誰もが少なからずこのような不安を抱くものである。またボランティアに参加する学生自身もこのような課題を抱えて成長してきたのである。今回参加した大学生(院生も含む)は、すでに教育実習を経験してきており、また中学生よりもやや多くの経験をつんできている点では異年齢の先輩である。したがって彼らの不安や悩みに付き合いサポートする存在として、彼らと年齢的にも近い学生によるアシスト活動は相互に感情や意思を理解し分かり合える存在としての協同のサポーターでもある。

(2) 岩出町立岩出中学校でのスクールボランティア活動

ここでは教育実践教室(松浦ゼミ)での活動は3カ年間にわたって4中学校へ、総数50名余りの学生が参加したが、ここでは主として平成13年度の岩出町立岩出中学校での活動内容をケーススタディーする。

①運営組織

スクールボランティア活動を円滑にすすめるために大学と中学校ならびに教育委員とで合同企画運営協議会を組織した。大学側、教員1名、学生代表2名、中学校側校長、教頭、教員4名、教育委員会側、教育長の10名。(これはフレンドシップ事業に位置づけているのでそのための組織でもある。)

②参加学生

4回生6名、3回生4名(計10名)

③活動内容

ア、授業サポート…前半は中学1年生を中心として、教師から依頼のあった授業にアシスト。教師が時間と科目を記入した依頼書を学生が持ち帰り翌日活動する学生がこれを参考にメニューを作成する。後半は依頼のあった授業に加え学生の医師で各担当クラスにはいり授業中の教室で恒常的なアシスト活動をおこなった。

イ、給食・掃除サポート…給食・掃除は基本的に各クラスに入りおこなった。生徒といっしょ

に給食をとり、そのまま昼休みをすごす。掃除も生徒と学生とがいっしょにおこなった。学生の報告では「掃除に参加しない生徒にも声かけをして掃除にさそった」そうである。

ウ、教師の事務的作業の補助

プリントの印刷、冊子の作成、パソコンへの打ち込み、賞状などへの押印

エ、クラブ活動サポート

10名の学生が各自の特技や希望によって、バレーボール、ソフトボール、剣道、陸上、バドミントン、バスケットボール、サッカー、吹奏楽、科学クラブなどに参加した。学生の報告によると「会議などでクラブ活動に顔をだせない教師に代わり自分たちの経験を生かしたアドバイスをし、一緒に活動し楽しんだ」そうである。

オ、生徒会活動へのサポート

生徒会が企画した「募金活動」への参加や、1年生全員によっておこなわれた「岩出中学校を考えるシンポジウム」の司会・運営・補助をおこなった。

カ、放課後の学習教室『きょうかん館』の運営と活動

放課後の空き教室を利用して学習教室を運営した。提起テスト前には、1・2年生の利用者も多かったがクラブ優先であるため主として3年生の利用が多かったそうである。学生の報告によれば「授業の分からないところを質問にくる生徒や、自主的に学習する生徒もいた。また学生と話したいからやってくる生徒もあり、その生徒の要求に応じた対応をおこなった」そうである。このアイデアと活動内容はテレビでも放映されたこともあり全国的にも注目されるようになった。

キ、意見箱『トスコ』の設置と活用

学生のアイデアから学生控え室前に生徒からの意見や相談用の箱が設置された。その名称が「トスコ」である。生徒からの相談件数は多くはないが素朴な質問から深刻な悩みまでさまざまな内容での投函があったそうである。返事は意見箱の横の掲示板に随時置くようにした。

ク、その他の活動

昼休みは図書室で本の貸し出しのサポートをおこなった。また配膳室では食器の片づけの手伝いをおこなった。

④実施期間

2001年10月21日(月)～12月22日(土)

(3) スクールボランティアの評価

スクールボランティア活動に参加した学生たちは、この活動が生徒や教師にどのように受け止められたか確認するためにアンケート調査実施した。その結果からスクールボランティア活動が受け入れ側にどのように評価されているのかを推定することができる。

①生徒と学生とのコミュニケーション

10名の学生は1年生の各クラスを担当していたため、2、3年生と比較して1年生とのコミュニケーションの状況をみると、学生と話したことがある生徒は「よく話した」、「まあまあ話した」を含めて57.6%であった。また話の内容は「勉強のこと」(45.7)、「部活動のこと」(34.2)が多くそのほか「友人関係」(11.0)、「趣味について」(13.3)などがあげられる。学生を放しやすいと感じたかでは「大変感じた」「感じた」が69.8%と7割の1年生が肯定的な回答を寄せていた。学生とのかかわりを求める生徒も7割以上に達した。このように年齢的に近い学生への親近感はかなり高いように思えるし、また教師や親とちがったコミュニケーション回路として生徒が評価しているとも判断できる。

②学生のクラブ活動サポートの評価

学生がサポートに入ったクラブの生徒たちは、学生が来たことに対して「大変よかった」「よかった」(合計81.4%)との高い評価をしている。また生徒の6割以上が学生に参加してほしいと考えていることも明らかになった。

③中学生は学生に何を望んでいるのか

中学生が学生に望んでいることは何か。まずは「授業中わからないところをサポートしてほしい」が49.8%と高い。つづいて「クラブ活動を一緒にしたい」(38.1)「話し相手になってほしい」(35.8)「授業中の先生の手伝いをしてほしい」(27.4)「掃除を一緒にしたい」(22.9)とつづく。

このようにいまの中学生がさまざまな場面でのサポートやコミュニケーションを学生に願っていることが明らかになった。とくに学習へのサポートが高いことについては、中学生は「わからないところを教えてくれるから」(71.7)、「教室の雰囲気がよくなった」(36.0)「授業が楽しくなった」(36.0)といった理由を挙げている。

このことは教師と生徒の間でおこなわれる学習スタイルへの一つのアンチテーゼとも考えられなくはない。学校での学習の形態やあり方を検討する一つのデータではないだろうか。

④来年も来てほしい

学生がスクールボランティアで中学校に来たことを9割近い生徒が肯定しており、また「来年も学生に来てほしい」「ぜひ来てほしい」が8割以上に達していることから生徒全般からスクールボランティア活動が肯定的にうけとめられていると判断してよいだろう。

⑤教師側の評価について

それでは教師側はどうであろうか、50名の教員のうち36名から回答を得たデータから少し見てみよう。学生と話したことがある先生は26人で話していない先生は10名いた。またスクールボランティアを活用したことがある先生は33人中20名で活用していないも13名にのぼった。活用した先生のなかで「役にたたなかった」との回答はなく、全員が「とても」「少し役に立った」と肯定している。ただし学生の接し方(態度)については35命中5名の先生が「あ

まりよくない」と回答していたので、100%学生が評価されているわけでもないようである。

上記のように学生が生徒と先生とのアンケート調査した結果の一部をみると、生徒からは高い評価が、先生からおおむね良好な評価が得られていると判断できる。ただし授業に学生がはいることへの教師側の戸惑いや抵抗感もまだあることは今後の大事な検討課題となるであろう。

3. スクールボランティア活動とこれからの教員養成の課題

(1) スクールボランティアで学生はどんな力を形成したか

スクールボランティアをはじめて3年が経過する。活動内容の基本は前章で紹介したとおりであるが、学校は生き物であるので受け入れ側、参加側の両者の状況により活動内容の幅は相当違ってくる。3年前は13名の学生が1年生の8クラスに分かれて2ヶ月間、とにかく学級に机と椅子を配置して生徒とかかわるスタイルであった。2年後は学生控え室から教師側の必要に応じてボランティア活動をするスタイルでスタートしたが、後半は2年前とほぼ同じ形で実施した。また2年前と異なり学生の創意で空き教室を改造して放課後の「学習教室」や意見箱の設置を新たに付加した。

このように年度により双方の条件により取り組みの形態は少しことなるものの、生徒と学生と教員とのあいだで繰り返される「教育的実践」(スクールボランティア活動)は基本的には変わってはいない。それぞれの活動をとおして生徒、教師、学生がさまざまな相互作用により何らかの力を形成している。ここでは主に学生側の力量形成について彼らがレポートした記録から考察する。

スクールボランティアの活動をとおして学生には主として3つの教育的実践力が形成される。

その第一は、生徒と向きあえる自己の存在の確立である。これは一般の教師にとっても基本的な力量であるがなかなか形成されにくいものである。どのような関係を生徒と向き合える存在とのかについてはここでは詳しく述べないが、教師という制度的存在であっても人間として生徒と向き合いかつ制度としての教師とも向き合える関係である。このような2重の存在であっても生徒との信頼関係を確立できる力量である。

たとえば3回生のTさんはスクールボランティア開始当日「ドキドキしながら教室に向かった。向かう途中これではダメだ。こんなに怯えていて上手くいくはずはないと思った。自分からいこう! 笑いかけよう…そう思った。ところが予想とは逆にそこには人懐っこい岩出中学の1年生たちがいた。一緒に給食を食べよう!! 生徒の一声に私は救われた。」と語っている。そしてその後彼女はさまざまな悩みを現代の中学生がもっていることを生徒の声をうけとめることで新たな相談者として自分を高めていく。

しかも、中学生Aさんの恋愛の悩みと真剣に向き合い、自分の経験を話すなかで相手との「友情」を確かなものにしていく。しかし彼女は自分をAさんだけの「関係の友達」でなく、「友達的な存在」の重要性に気づくようになる。そしてAさん以外の生徒にも同じような視線で向かっていく。

第二は、学生にとって生徒と向き合える自己の存在を契機に生徒理解への見識を深めていくことが可能となる。たとえば教室やクラブに日常的に参画するなかで、ゼミで学習した生徒理解の見識を中学生の現実からあぶりだせる（透視できる力量）ことができるようになるのである。

4回生のYさんは、クラスに存在する5つの女子の仲良しグループのもつ閉鎖性と可能性について実際に彼女たちと対話することによって、彼女たちのもつアンビバレントな心の動きと行動を「すばらしき葛藤」として受け止めることができるように成長している。

たとえば、もし教師が女子グループが閉鎖的なものだという固定観念から彼女たちを指導しグループの解散を迫ったとすればどうなるのか。そのことに関して彼女はクラスではそのような指導があると推測し、「その事実（教師の一方的な指導）を確かめ合った5人は、表面的な明るさで教師たちに適当にあわせるようになったという。私の見た限り、先生は意識して彼女らの機嫌を取るか、逆に完全に無視するかどちらかの対応をしていた。彼女らをうまくリーダーに据えることができれば、より活気あるクラスや授業が実現する。私が教師なら、やはり彼女らの力を生かしたいと考えるであろうが、彼女らの表面の言動とは裏腹な心の傷は、癒されはしないだろう。」と厳しく中学生の現実をみつめている。このような見識（実践知）が果たして彼女が教員になったときに実体化するかどうかはまた別問題である。この現実場面で彼女が実際中学生との対話をとおして語った事実において生徒理解の見識を深めていると判断できるのである。

第三は、スクールボランティア活動をとおして「自分は何ができるか」、この現実をどう工夫すれば生徒や先生方、学校はプラスの方向に進むのかといった状況的認知からの実践的な力量が形成される点である。

13年度のスクールボランティア活動ではそのことが如実に立証できたように思う。たとえば科学クラブを担当した3回生のGさんは、その場で中学生が求めているのは何か、彼らを驚かせ科学に興味をもつためのさまざまなアイデアを生徒に提供している。彼女の報告から少し見てみよう。「私が企画したのはダンボールで作る空気鉄砲、光の万華鏡、10円玉の酸化還元実験の3回である。驚いたことに空気鉄砲の製作後、生徒は自分たちで空気の流れの様子を研究し始めた。子どもの興味は限りない可能性につながっているのだと感じた。」

これはクラブ活動でのGさんの「何ができるのか」という問いを立て、その結果の工夫と実践である。そのほか、さきほども述べたように、空き教室を学校から借りることにより、学習の相談にのるアイデアは、生徒たちの大きな共感と支持をえた。コミュニケーション回路のあらたな工夫として、意見箱を設置することを思い付き、箱を設置し、投函された相談に真摯に対応する学生たち。このような生徒との前向きなレスポンス（応答）が両者の信頼感を形成していくので

ある。

(2) 教員養成の新たなシステムとしてのスクールボランティア活動

岩出中学へのスクールボランティア活動の事例から、これらの活動が学生の①対人応答力（レスポンス）、②生徒理解力、③問題解決力（アイデア）の3つの力量を形成する可能性を明らかにした。

従来からの教育実習が主として学習指導案づくりや授業力の形成に重点があることは否めない事実である。それは教育実習の主要な役割であり本来の姿ともいえる。しかしながら教員養成はいまやそれにとどまらず児童生徒理解を基盤とする人間形成力への力量をも重視せざるを得ない段階に立ち至っている。それはいじめや不登校、生徒の荒れや学級崩壊などの問題の多様化・一般化という課題に学校教育が応える責務からだけでなく、教員養成そのものが人間形成力を必要としているからである。大学における教員養成は、人間理解を基盤に科学や文化の基礎的理解と教授・学習体系の実践知、ならびに社会性の形成をめざす生徒指導への実践知の両輪によって機能するのである。さらに将来的には学校経営における実践知も教員養成の基盤に体系化されるだろう。

したがって今後の教員養成は、従来型の大学と附属学校、大学と実習校といった選択肢以外に学生の参画エリアの拡大をはかる必要があるだろう。彼らをさらに広い世界に向かわせるなかで教職そのものを肥らせることが可能になる。そして教員養成が大学の枠組みから開かれることにより時代と社会の変動に対応したシステムへと転換する。スクールボランティア活動はそのような改革への一石を投じたと考えられるのである。

小 括

スクールボランティア活動はいまやどの地域においても取くまれだした。沖縄や和歌山の地方の一つの試みが同時に拡大する速さには驚くべきものがある。しかしながらこの活動の意味や役割を問う研究はまだ始まったばかりである。本論もそのような前提のない状況での試論にすぎない。したがって今後この類の研究が発展することをこころから願うものである。

一方、ボランティア活動を義務的な奉仕活動と同一視する議論もあるが、両者はやはり異質なものである。前者はあくまでも主体の自発性・自主性にもとづくものである。したがってボランティア活動を義務づけることはその精神を解体するに等しいであろう。私個人としてもスクールボランティア活動が大学の授業の必修や単位化に本来なじまないものだと考えている。単位取得申請する学生も今のところ少ないようである。

私のところでは、活動はゼミ単位でとりくんでいるものの参加・不参加は学生の自由であり、参加の仕方も学生たちが学校側と交渉して決めることにしている。学生の企画に私が引っ張られ

ているのが現実であり、昨年度の「きょうかん館」などは私の知らない間に企画・進行して有名になっていたのである。

そこには現代の青年たちの英知と実行力があふれ出ており、その意味では未来を彼らに安心して託すことができると私は確信している。^{注3)}

3年前の活動開始時点でこの活動のリーダーシップをとった森長君は当時も後輩から慕われていたがいまは小学校で子どもとともに歩む教師として成長している。志波君はNPOの事務局で活躍している。そして彼らに続くように多くの学生が教職をはじめ社会的な活動の道を歩んでいることに私はいささか満足している昨今である。

〔注〕

注1) 長沼豊「ボランティア学習の概念と学習過程」(日本図書刊行会1998、p. 26)

注2) 和歌山大学附属教育実践総合センター「平成13年度スクールボランティア活動報告書」(2002・3.25) 参照

注3) 和歌山大学教育学部教育実践教室「現代中学生とスクールボランティア活動に関する調査研究—和歌山県那賀郡岩出中学校をフィールドにして」(2000. 5.25)